分野別研究組織成果報告（2014 年度）

# プロフェッショナルの形成と功績―「お雇い」英国人鉄道技術者の技能とステータス

The Establishing and Accomplishing of the Professionals in the Case of “Hired” British Railway Engineers.

林田　治男（HAYASHIDA Haruo）

英国土木学会（the Institution of Civil Engineers、土木技師協会と訳されることもある）は GeorgeⅣ世治下に勅許状を得て、Thomas Telford（1757－1834 年）の指導で、技術工学の一般的発展、特に土木技師の専門知識の獲得を促進するために、1828 年 6 月、王立協会の中に設立された。その憲章には、「自然の大いなる力の源泉を、人類の使用と便益のために監督する技巧」が学会の本質であると同時に目的とされている。文明化された時代を支える技師、産業革命の担い手という意味合いである。

ところで、村岡健二氏（『ヴィクトリア時代の政治と社会』第 3 部 1 章「技術者の社会的地位―土木技術者を中心に」）に拠れば 、技師の中で土木技師の地位が最も高く、入会するにはプロフェッショナルとしての知識や教養を要求された。入会条件の詳細は省くが、会員・準会員（Member, Associate）とも技能とステータスが高かったことは論を俟たない。

明治期に「お雇い」として来日した鉄道技師のうち、22 名が土木学会加入者で、3 名が機械学会加入であった（重複加入者 1 名）。この点からも、彼らの技能が高かったと言える。うち大学卒業者は 2 名、中退者が 2 名となっている。さらに学会報告を行った者が 11 名、そしてその報告がすぐれているとして Telford Premium を受賞したのが 2 名となっている。1895 年土木学会名簿でその数を調べると、報告者は全体の 8.9%、受賞者は 3.2%となっているので、彼らが学会活動にも貢献し、高く評価されていたことが裏付けられる。

彼らの日本における貢献のみならず、赴任前後の経歴を「入会申請書」「追悼記事」などを中心に再構成していくと、師事した技師、職務経歴などから例外なく優秀であったことが判明する。さらに特許保有者が 2 名、任地のメキシコで新種の魚を発見したと大英博物館に報告した者が 1 名あった（村岡説を補強）。また父親の職業や社会階層を加味すると、ほぼ例外なく中産階級の出身者である。つまり彼らは恵まれた家庭環境に育ち、優れた技師の下で技能を身に着け、社会に貢献したと断定できる。在任期間も条件ではあったが、日本政府から 6 名が叙勲され、6 名が報奨金（死亡時の特別下賜金受給者 2 名を含む）ことも、その評価の高さを示している。なお先行研究では、日本における経歴のみが取り上げられていた。

以上のような研究成果を、初代技師長『エドモンド・モレル』（近刊予定）、および「英国人鉄道技師の叙勲」として結実させることができた。